

◎ 人事異動

平成14年11月1日付

命 研究所次長（システム事業開発担当）

鴨 居 道 明

植調協会だより

編集後記

不景気を反映してか、自分だけよければという身勝手な振舞が横行している。金庫を丸ごと持ち去る不逞のやから、引ったくり、内職斡旋詐欺などなど。自分のことしか考えない人が多く目立つような世相となった。困ったものだ。

下の写真は米を作っているのかノビエを作っているのか判断に迷う水田の情景である。これもその一つかも知れない。今年の9月上旬、消費者価格がワンランク高い「新潟のコシヒカリ」の産地、新潟県の穀倉地帯で撮影したひとコマである。1枚10アールに区画整理された水田が見渡す限り続く水田地帯のところどころに2枚、または3枚とまとまった水田で、稲穂より一段と高く伸びたタイヌビエが田全面に密生し、遠くから見ると他は黄金色の稲穂がなびいているのにここだけは黒っぽく見える程タイヌビエが発生している。優れた除草剤が出廻っている21世紀の水田とは思えない光景である。この状態では減収は勿論、米にノビエの種子が混入し等級が落ちるとともに、大量のノビエの種子が水田に落下し、翌年はこの水田だけではなく、種子が水の流れとともに近隣の水田に広がり、付近一帯の水田にノビエが大発生し、付近の水田は大迷惑を被る。ノビエの大発生の原因はなんだろう？。若し、この水田の耕作者が有機農業と名づけて、それを理由に米を高く売っているとしたら、他人の迷惑を考えない身勝手な行動と厳しく非難されなければならない。

現代社会は信頼を基本として秩序が保たれている。他人に迷惑をかけない。これは秩序を保つ上で最低の常識である。ノビエだらけの水田を見て暗い世相の一端を覗いた思いで冷たい風が心を吹き抜けた。お互い信頼し合い、除草剤が進歩した21世紀の水田は、ノビエ一本見られない黄金色の波打つ水田であって欲しいと願うものである。㊦



財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
電話 東京(03)3832-4188 (代)

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁
発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

平成14年11月発行

定価420円（送料276円）

植調第36巻第8号

（本体400円、消費税20円）

発行所

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会

植調編集印刷事務所

電話 東京(03)3833-1821番(代)

印刷所

新成印刷(有)